6課

2月7日

キリストにのみ頼る

安息日午後	1月31日

暗唱聖句

すなわち、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり、なんとかして死人のうちからの復活に達したいのである。（ピリピ3：10、11、口語訳）

わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。（フィリピ3：10、11、新共同訳）

今週の聖句

フィリピ3：1～16、ローマ2：25～29、ヨハネ9：1～39、エフェソ1：4、10、Ⅰコリント9：24～27

今週のテーマ

律法の行いによるのではなく、信仰によってのみ救われるということについて、私たちには何か釈然としないところがあるようです。つまり、私たちはみな、どういうわけか自分の行いが救いの足しになるかのように、行いに傾倒しがちなのです。パウロは、割礼が救いに必要だと主張する人々に対する激しい反論の中で、この点をかなり印象的に論じています。

パウロは、割礼などの行いが救いに貢献していると、ある人たちが考える可能性を防ぐために、義は律法によってではなく、信仰によってもたらされるキリストからの賜物であることを明確に述べています。割礼は、今日では問題にならないかもしれませんが、それが扱う原則自体は、今なお問題です。

宗教改革そのものが、まさにこの問題、つまりキリストに従う者の経験における信仰と行いの役割をめぐって始まりした。 結局のところ、キリストは私たちにとってすべてであり、「信仰の創始者また完成者」（ヘブ12：2）です。もし私たちが優先順位を正しくつけているなら、私たちは「肉に頼らない」（フィリ3：3）で、神の愛を確信しながら生き、今でも救いの約束を享受できるでしょう。

日曜日　２月１日　主において喜ぶ

問１　フィリピ３：1〜3を読んでください。ここでパウロは、どのような肯定的な言葉と否定的な言葉を発していますか。また、それらはいかに関連していますか。彼は信者をいかに描写していますか。

パウロは非常に肯定的な言葉で始めており、まるで手紙を締めくくっているかのようです。しかし、まだ終わりではありません。彼はこの書簡の主題の一つである「主において喜ぶこと」に戻ります。そして、その理由をいくつかここで挙げています。最も重要なのは、私たちが自分自身を頼るのではなく、キリストを頼らねばならないということです。「わたしたちは……キリスト・イエスを誇りとし、肉に頼らないからです」（フィリ3：3）。私たちの中に、何らかの形でつらい体験をして、肉に頼る愚かさを学んだ人はいるでしょうか。

「注意しなさい」「気をつけなさい」「警戒しなさい」という三度もの強い警告は、聖書のどこにも見当たりません。フィリピの信徒は、パウロが言及している脅威をよく知っていたようです。この警告は、三つの別々の問題を指しているのではなく、三つの異なる形で表現された一つの偽教師のグループを指しているようです。

イスラエルにおいて邪悪な人や不信心な人は、「犬」と呼ばれることがありました（フィリ3：2、詩編22：17〔口語訳22：16〕、イザ56：10、マタ7：6、Ⅱペト2：21、22と比較）。偽教師は、「よこしまな働き手」ともふさわしく表現されています。彼らが「切り傷にすぎない割礼を持つ者」（フィリ3：2）と呼ばれていることは、ガラテヤやほかの地域と同様、彼らが使徒会議（使徒15章参照）の決定に反して、異邦人の信者に割礼を強制しようとしていたことを示しています。

興味深いことに、偽りの教えの蔓延を含む霊的な課題に対する解決策の一つは、「主において喜ぶ」（フィリ3：1、同4：4と比較）ことであるようです。

私たちが「喜ぶ（rejoice）」ものは何であれ、「喜び（joy）」をもたらします（英語と同様、これらの言葉に相当する二つのギリシア語は関連している）。神は、私たちが喜びに満たされることを望んでおられ、神の言葉は、真の幸福と永続的な喜びのための一種の取扱説明書です。その幸福と喜びには、神の慈しみを受けること（詩編31：8〔口語訳31：7〕）、神に信頼を置くこと（同5：12〔口語訳5：11〕）、救いの祝福を受けること（詩編9：15〔口語訳9：14〕）、安息日を含め（イザヤ58:13, 14）、神の律法を私たちの生き方として受け入れること（詩編119：14）、神の言葉を信じること（詩編119：162）、敬虔（けいけん）な子どもたちを育てること（箴言23：24、25）などが含まれます。

月曜日　2月2日　パウロの「過去の人生」

キリスト教に改宗した人が、イエスを受け入れる前と受け入れたあとという観点から自分の人生を考えることは、よくあることです。パウロもフィリピ3章でそうしています。とはいえ、正しいか間違っているかは別として、私たちは時々、クリスチャンでない人を「良い人」と呼びますし、少なくとも世間の基準からすれば、実際に多くの人が善良でしょう。それに対して、神の基準からすれば、誰も善良ではありません。クリスチャンでさえもそうです。

問2　フィリピ3：4～6で、パウロはかつて自分の人生で誇りに思っていた多くのことを挙げています。それらは何でしょうか。あなたは、自分自身の人生（過去と現在）における「良い」ことを、どう表現しますか。

パウロは、偽りの教義を広めているユダヤ人の信者と、自分の救いを全面的にキリストに頼り、割礼のような単なる人間の行いに頼らない無割礼の信者とを暗に対比しています（ヘブ6：1、9：14参照、ロマ2：25～29と比較）。パウロの過去の人生や家系は、同胞のユダヤ人にとっては非常に印象的なものだったでしょうが、こういったことはどれも彼の救いには役立ちませんでした。それどころか、彼の救いを妨げました。なぜなら、それらのゆえに、しばらくの間、彼はキリストの必要性に気づけなかったからです。

パウロは単に割礼を受けたのではなく、「八日目に割礼を受け（た）」人でした。つまり、生まれながらのイスラエル人であり、契約の民に属する者として、八日目に割礼を受けたのです。さらに、彼はベニヤミン族の出身で、その領土にはイスラエルの最も重要な都市がいくつか含まれていました。パウロはヘブライ語を知っていただけでなく、ガマリエルの弟子であり、ファリサイ人であったため（使徒22：3、26：4、5）、律法と、少なくとも言い伝えによる、その適用方法の知識に精通していたはずです。

パウロは律法にとても熱心であったため、律法によって規定されているユダヤ人の生き方を教会が脅かすと考え、教会を迫害しました。興味深いことに、人間的な「義」という点では「非の打ちどころのない者」であったにもかかわらず、パウロは、律法が実際には想像以上に深く、厳しいものであり、キリストなしに律法の前に立てば、罪に定められることに気づいたのでした。

ローマ7：7～12 とマタイ5：21、22、27、28を比較してください。律法についてイエスとパウロは、どのような重要な点を指摘していますか。また、律法ではなく、「キリストへの信仰」（フィリ3：9）だけが義の源であるのはなぜですか。

火曜日　２月３日　大切なこと

昨日の研究で指摘したように、かつてパウロが誇りにしていたものは、実のところ、彼の信仰の妨げになっていました。なぜなら、それらがキリストの必要性を彼に気づかせなかったからです。パウロは、商売上の用語（「有利（利益）」と「損失」）を使って、信仰以前の自分の霊的帳簿を説明しています。あまり考えたくはありませんが、人間は誰でも「霊的帳簿」を持っています。以前、パウロの帳簿は、イエスが教えられた聖書の価値観ではなく、当時のユダヤ人の価値観で評価されていました。

回心後、彼の霊的帳簿は大きく変わりました。なぜなら、その価値の尺度が、「ユダヤ教の貨幣」から「天の貨幣」へと劇的に変化したからです。

「天から降って来られたお方は、天について語ることができ、天の貨幣を形作っているものを正しく示すことがおできになる。その貨幣の上に、彼はご自分の肖像と銘を刻まれた。彼は、堕落から引き上げ、ご自分の玉座の傍らにまで高めるために来られた人々が置かれている危険をご存じである。彼は、無益で危ういものに愛情を惜しみなく注ぐことの危険性を指摘される。彼は、私たちが時間や才能や機会を、まったく虚しいものに浪費しないよう、地上のものから天上のものへと心を引き離そうとなさるのである」（『アドベント・レビュー・アンド・サバト・ヘラルド』1890年7月1日号、英文）。

１世紀のユダヤ教の世界において、パウロは人気急上昇中の人物でしたが、栄光を受けられたイエスをダマスコ途上で見て、目が見えなくなり（使徒9章）、彼の霊的な視力は矯正され、はっきり見えるようになったのです。

問３　ヨハネ９章には、生まれつき目の不自由だった別の男がイエスをはっきりと見たという話が記されています。イエスは、ご自分がこの世に来られたのは、「見えない者（が）見えるようになり、見える者（が）見えないようになる」（ヨハ９：39）ためであると言われました。この原則は、あなた自身の人生にいかに適用できるでしょうか。

天国と新しい地での永遠の命よりも価値あるものが存在するでしょうか。しかし、この世の価値観は、多くの人がこの事実を見えないようにしています。この世で価値あるもの（マタ13：22、ルカ 4：5、6、Ⅰヨハ2：16参照）と天で価値あるもの（キリストに似ることや救われた魂）との間には、そもそも相いれない対立関係があるのです。

本当に重要なことに目を向け続けるための鍵は、何でしょうか。

水曜日　2月4日　キリストの信仰

パウロはダマスコへの途上で、律法に基づく古い生活と引き換えに、キリストご自身の臨在を手に入れるというすばらしい経験をしました。「キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです」（フィリ3：8、9）。

問4　「キリストの内にいる」というのは、興味深い表現です。エフェソ1：4、IIコリント5：21、コロサイ2：9、ガラテヤ2：20を読んでください。パウロがこの表現をどのような意味で用いていると、あなたは思いますか。

「キリストの内に〔in Christ〕いる」というパウロの表現は、広く議論されてきました。当然のことながら、おそらく最も良いその説明は、パウロ自身の言葉にあります。「こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに〔in Christ〕一つにまとめられます」（エフェ1：10）。それが最初から神の目的でした。そしてパウロは、それがいかに起こるかを次のように明らかにしています。「神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖（あがな）いとなられたのです」（Iコリ1：30）。

「キリストの内にいる」というのは、霊的知性の目覚め（知恵）から、信仰による義認（義）、天国への準備（聖化）、そして再臨における栄化（贖い）に至るまで、救済計画に含まれるすべてのことを包含しています。救済は、一貫して、私たちのための、私たちの内におけるキリストの働きです。したがって、キリストを得ることで、私たちは必要なものをすべて手に入れられるのです。

問5　フィリピ3：9を読んでください。パウロはどのような二つのものを対比していますか。この対比を常に覚えておくことは、なぜ重要なのですか。

パウロが言うように、「律法から生じる自分の義」は本物の義ではありません。律法ではなく、キリストだけが信仰によって命を与えることができるからです（ガラ3：21、22参照）。悪魔さえ信じているので（ヤコブ2:19）、どのような信仰でもよいわけではありません。救いを得させる唯一の信仰は、「キリストの信仰」です。キリストの信仰だけが、完全に従順であり、従うことができます（「信仰」に相当するギリシア語は、「忠実さ」をも意味する）。私たちは、キリストへの私たちの信仰を通して、キリストの信仰によって生きるのです。

問６　フィリピ３：10～16を読んでください。この箇所でパウロが指摘しているおもなポイントは何ですか。

確かに、キリストを知ること以上に大切なことは何もありません。キリストを知ることは、最終的にキリストが私たちを知り、父なる神の前で私たちを認めてくださることを保証します（マタ７：21～23、10：32、33参照）。私たちは、いかにしてキリストを知るのでしょうか。書かれた御言葉を通して、つまり御言葉を読み、御言葉を実践することによって知ることができます。私たちは、十二弟子のようにキリストを直接見て、知ることはできません。しかし興味深いことに、キリストを直接見ても、彼らはキリストの御言葉を理解できませんでした。これは、私たちには聖霊の導きが必要であることを強調しています（ヨハ16：13参照）。キリストを知れば知るほど、私たちはキリストに近づきます。なぜなら、私たちは「キリストとその復活の力」（フィリ３：10）を体験し、それが私たちを「新しい命」（ロマ６：４）へと引き上げるからです。

私たちがイエスに近づくもう一つの方法は、「キリストと……その苦しみにあずか（る）」（フィリ３：10）ことです。試練に直面し、辛い経験をするたびに、イエスが私たちのために経験されたことをより深く知り、感謝するとともに、イエスとその御心をより明確に理解することができるようになります。

イエスに近づくための三つ目の方法は、「目標を目指して」突き進むことです（フィリ３：14）。その目標とは何でしょうか。これは、新約聖書においてここだけで使われている言葉（「スコポス」）で、競争のゴールラインや勝者に与えられる賞を指します。パウロはそれを、「神がキリスト・イエスによって、上へ召して、お与えになる賞」（同）と呼んでいます。キリストが死と復活を通して天に昇られたように、神は、同じ天の報酬、つまり永遠の命を受けるよう、私たちを招いておられるのです。

明らかに、私たちはまだそこに到達していません。私たちの「卑しい体」が「御自分〔キリスト〕の栄光ある体と同じ形」（フィリ３：21）に変えられるまで、私たちは本当の意味で完成されることがありません。しかし、イエスを知り、私たちの日々の生活に臨在していただくことで、私たちは今、あらゆる点でイエスのようになるという目標に向かって突き進むことができます。これが、パウロが集中して取り組んでいた「ただ一つ」のことなのです。競走をしているのと同じように（Ｉコリ９：24～27参照）、私たちはこれまで自分がいた場所や、自分のあとを追ってくる人のことなど気に留めません。私たちの唯一の関心は、前にあるもの、つまり私たちを待っている天の賞にあります。

金曜日　2月6日　さらなる研究

「健全で均斉のとれた品性を築きたいと思う者、よく釣り合いのとれたクリスチャンになりたいと思う者は、すべてをささげて、キリストのために全力を尽くさなければならない。なぜなら、あがない主は、分割された奉仕をお受け入れにならないからである。日ごとに服従の意味を学ばなければならない。神の御言葉を研究し、その意味を学び、その教えに従わなければならない。こうして、クリスチャンとしての卓越した標準に到達できるのである。神は毎日共に働いてくださり、最後の試みの時に耐えられるような品性を完成させてくださる。こうして信者は、福音が堕落した人間にできることを示し、人々や天使たちの前で、崇高な試みを日ごとに成し遂げていくのである」（『希望への光』1540ページ、『患難から栄光へ』第45章）。

「花婿（はなむこ）を待ち望んでいる者は、『あなたがたの神を見よ』と、人々に言わなければならない。憐れみに満ちた最後の光、世界に伝えるべき最後の憐れみの使命は、神の愛の啓示である。神の子らは、神の栄光をあらわさなければならない。彼らは、その生活と品性において、神の恵みが彼らのためにどんなことをなしたかをあらわさなければならない。

義の太陽の光は、良い行い――真の言葉、清い行いなどによって、輝き出なければならない」（『希望への光』1350ページ、『キリストの実物教訓』第29章）。

話し合いのための質問

❶ 主において喜ぶということについて、じっくり考えてみてください。これは、試練を喜びなさいと言っているのではなく（それも聖書的な教えですが）、主において喜びなさいと言っていることに注目してください。主とその善良さ、その力、その愛、その救いを常に心に留めておくことは、なぜ重要なのでしょうか。人生の避けられない試練の中で、そうすることは、あなたにいかに大きな恩恵をもたらすでしょうか。

❷ 金曜日の引用文が、私たちクリスチャンの行う「良い行い」を生み出す恵みの役割をいかに説明しているかに、注目してください。キリストが間もなく来られるのを待ち望む私たちにとって、なぜこの恵みの働きは、重要なのでしょうか。つまり、私たちは善行によって救われるわけではありませんが、もし善行が私たちにまったく見られないとすれば、私たちは本当に救われていると言えるのでしょうか。

❸ 肉に頼らないということについて、さらに考えてみてください。それはどういう意味でしょうか。なぜ私たちは肉に頼るべきではないのですか。私たちの肉は、神からの賜物ではないでしょうか。